

巢鴨警察署長殿

## — 陳述書 —

2008年3月5日

ルポライター米本和広

〒

電話

米本和広

後藤徹さんの拉致監禁事件について、以下に陳述いたします。

一、私の職業はルポライターです。様々な分野を取材の対象としてきましたが、後藤徹さんの事件になぜ関心を抱いているのかに関連することに限って、私のこれまでの仕事の経歴について書いておきます。少々長くなってしまうのは、私の立場を鮮明にしたいからです。

私は宗教法人「幸福の科学」の取材をきっかけに、疑似宗教団体を含め新興宗教、十数年前からの流行の言葉を使えば、いわゆる「カルト」集団について関心を抱き、執筆してきました。

これまで批判的に記事として取り上げたのは「幸福の科学」「コスモメイト」(現パワフルメイト)「法の華三法行」「顕正会」「浄土真宗親鸞会」「エホバの証人」「統一教会」「ライフスペース」「ヤマギシ会」の各団体です。執筆した媒体は主に月刊誌です。

幸福の科学は『大川隆法百問百答』(宝島社)、ヤマギシ会は『洗脳の楽園』(洋泉社)、雑誌記事をまとめたものとして『教祖逮捕』(宝島社)を単行本として出版しました。また、カルト二世の現状については『カルトの子』(文藝春秋社)でまとめて執筆いたしました。

二、カルト批判記事を数年間にわたって書き続けていると、信者の家族からたくさん質問や相談がきます。その中でも最も多かったのは「どうしたら信者を脱会させることができるのか」というものでした。そこで、私の問題意識はカルト批判からカルトからの脱会方法に変わっていきました。

その取材の過程で、統一教会の信者に対する脱会方法として、信者を拉致し、監禁下で説得していることを知りました。カルトからの脱会活動は人権尊重、正義の実現として行なわれているものだと思い込んでいた私にとっては大きな

衝撃でした。これについては別冊宝島『救いの正体』で書きました（ルポは『教祖逮捕』に所収）。

三、これを契機に、この世で誰にも知られていない、水面下で行なわれている拉致監禁説得のことをスクープしたいと考えました。取材対象者は価値中立的な元信者でなければなりません。拉致監禁説得から脱出して統一教会に戻った現役信者、また拉致監禁説得によって脱会し反統一教会派に変わった元信者に話を聞いても、たぶんバイアスがかかったものである可能性があったからです。

「拉致監禁説得によって脱会したが、拉致監禁説得そのものも批判する元信者である」ことを取材対象の条件としました。

取材対象者を探すのはきわめて困難でしたが、ようやく3人の女性と出会うことになりました。彼女たちの証言をもとにまとめたのが、2004年11月号発刊の月刊『現代』の「書かれざる『宗教監禁』の恐怖と悲劇」というルポですので、提出します。

3人の女性の証言等によって、拉致監禁という手法が信者の心身にPTSD（心的外傷後ストレス障害）など重大な障害を与えること、仮に脱会に成功したとしても、家族関係は益々悪化する傾向にあることがわかりました。そして、統一教会系の出版社、光言社から出版されている、拉致監禁の体験を綴った『脱会屋の全て』（鳥海豊著）と『人さらいからの脱出』（小出浩久著）は真実を語ったもの、つまり、拉致監禁のひどさを告発してきた統一教会の訴えは真実であることが確認できたわけです。

現在、ルポを単行本として出版するために取材と平行して執筆を続けています。単行本にするには、さらにいくつかの新しい情報を盛り込むことが必要であるため、統一教会には新たな拉致監禁が発生した場合には連絡して欲しいと頼みました。拉致監禁に関する情報にオーバーな表現、あるいは意図的な情報操作はないと確信できたからです。

単行本のための取材を始めてからいくつかの情報を教えてもらいましたが、その一つの情報が今回の後藤徹さんの事件だったというわけです。

前置きが大変長くなりました。陳述書の本題に入ります。

四、2月12日、統一教会から次のような連絡が入りました。

「後藤徹さんという信者が2月10日に監禁場所から出てきて、本部に助けを求めてやってきた。12年余り監禁されていたという。痩せ細っているため、緊急入院した」。

咄嗟に浮かんだのは「新潟少女監禁事件」でした。少女が監禁されたのは9

年。それより3年も長い12年余りと聞いて、にわかには信じられず、ピンときませんでした。私が取材した監禁体験者で、もっとも長く監禁されていたのはルポにも登場する富澤裕子さんの1年3ヶ月でした。その10倍もの長さですから、信じられないのは当然です。

翌日の2月13日、私は統一教会の職員の方に同行をお願いして、後藤さんが緊急入院したという一心病院に行きました。後藤さんから話を聞くのであれば、退院後の落ち着いたときがベストですが、急いだのは痩せ細っている様を見ておきたいと思ったからです。

五、一心病院の会議室で、後藤さんに会いました。後藤さんは車椅子で入ってきました。さっそく、腕や足など身体つきを見せてもらいました。迂闊なことにカメラを持ってくるのを忘れたため、職員の方からカメラ機能付きの携帯電話を借りて写真撮影をしました（写真撮影報告書1）。後藤さんの身体つきは、骨と皮、そこに萎えた筋肉がくっついているという感じでした。

立った姿で写真を撮りたいとお願いしたのですが、後藤さん一人の力で立ちあがることができず、職員の方に補助をお願いしました。後藤さんの立ち姿の写真に、別の人の手が映っていますが、これは後藤さんを支える職員の方の手です。

右足の親指は水虫が悪化した状態でした。後藤さんによれば「何度も薬を買ってきてくれと頼んだけど、無視されたために次第に悪化していった」といいます。

六、短時間ですが、後藤さんから聞いた話は以下の通りです。年月日や細部は実際とは少し違うかもしれませんが、なにしろ12年余りの監禁場所から身一つで出てきた日から、3日後に聞いた話ですから。

(1) 95年9月11日、保谷市（現、西東京市）の実家で拉致され、新潟のマンションに監禁された。監禁場所に常時いたのは、両親、実兄の嫁、実妹の4人。兄は宮村峻の会社に勤めていたので、土日にやっていた。つまり、兄嫁は新潟の監禁場所、兄は東京で暮らすという別居生活をしていた。兄と嫁、妹の3人はやはり拉致監禁にあつて脱会した統一教会の元信者である。

(2) 監禁現場に脱会の説得にいつもやっていたのは、新津福音キリスト教会の牧師である「松永堡智」だった。

(3) 新潟のマンションには2年余り監禁されていた。父親がガンで亡くなったため、今度は、東京杉並区荻窪のマンションに移送され、そこで監禁された。97、8年頃のことだったと思う。

(4) 荻窪のマンションと一緒に監禁生活を送っていたのは母親、兄夫婦それ

に妹。脱会説得にいつもやってきたのは「宮村峻」だった。宮村のほかには  
子、子、文明など元信者がやってきていた。玄関には、外に出  
られないように南京錠とチェーンがかけられていた。宮村たちがやってくる  
ときには、家族が南京錠を開けて、招き入れていた。

(5) 宮村が数年前から突然来なくなった。何度も逃げようとしたが、家族総  
出で押さえつけられるために、マンションから脱出することはできなかった。

(6) 2年前に3回目のハンガーストライキを行なったあと、粗末な食事しか  
出されなくなった。朝はパン、昼と夜はご飯に汁だけ。夜はときたま小魚か納  
豆が出た。家族は横でおいしいものを食べていた。とても屈辱的だった。95  
年に監禁されてから一度も外には出してもらえなかったことから筋肉は萎え、  
また2年前から粗末な食事しか出してもらえなくなったので、次第に痩せ細って  
いった。

(7) 2月10日の午後、突然、兄たちから放り出されるようにして玄関の外  
に追い出された。玄関を閉めたあと、再び玄関が開き、履物を放り出してきた。

「これまで長い間、監禁しておいて、いきなり身一つで追放するなんて、あま  
りにもひどい、身勝手だ」と玄関を叩いて、抗議したが、梨のつぶてだった。

(8) 12年間余りも監禁されていたため、行くあてはなかった。唯一覚えて  
いたのは渋谷の松濤にある統一教会本部だった。お金は一銭もなかったため、  
荻窪から歩いて渋谷に向かった。しかし、途中でふらふらになり、歩けなくな  
ったので、通行人の人からお金をもらってタクシーに乗った。

(9) 荻窪のマンションは天沼陸橋の前にあり、「荻窪」「フラワー」という文  
字のあるマンション。その804号室に監禁されていた。

七、後藤さんの話を聞いて、いくつかのことを思い出しました。

牧師の松永と宮村は「三」のところで書いた『人さらいからの脱出』、宮村は  
『脱会屋の全て』に登場する脱会説得者であり、後藤さんのところに説得にや  
ってきた子はやはり二つの本で登場する元信者だということです。

つまり、これらのメンバーは拉致監禁に関わる常習者だということになりま  
す。

宮村峻は、電気工事、広告代理業を営む「株式会社」という会社の社  
長で、副業なのかライフワークなのかは知りませんが、古くから脱会請負業を  
している人であること、彼の会社は彼が脱会説得した信者を雇用していること  
で、統一教会に反対する人の間ではつとに有名でした。

また、後述する統一教会と闘う「被害弁連」の間で、宮村は信者家族から法  
外な金を取るということで悪評高く、「被害弁連」が主催する集会に宮村を参加  
させないことが申し合わされたと聞いています。

ところで、[ ]子の名前を聞いたときは少々驚きました。彼女については現在書いている本でも取り上げようかと考えていたからです。[ ]子は宮村峻が脱会説得し、脱会したあとは「青春を返せ訴訟」に参加しています。

なぜ、私が驚いたか説明します。

統一教会と闘う団体に、弁護士で構成している「全国霊感商法対策弁護士連絡会」(通称、被害弁連)があります。私はカルト批判の記事を書いたため、被害弁連に所属する弁護士とは懇意にしてきました。この被害弁連の事務局員に「[ ]さん」という女性の方がいます。2、3回会ったことがあり、被害弁連の資料をもらうときには[ ]さんを通してお願いしてきました。

本の取材を始めてから、被害弁連に所属していたある弁護士から「[ ]さんの本名は[ ]子である」と聞きました。

もし[ ]さんと「[ ]子」が同一人物だとすれば、拉致監禁という違法行為に、弁護士集団の事務局員が関わっていたこととなります。このため、[ ]子には関心をもっていたため、後藤さんの口から彼女の名前が出たときには驚いたという次第です。

後藤さんと面談した翌日以降のことについて、陳述いたします。

八、翌日の2月14日、後藤さんのマンションを特定するために、荻窪に出向きました。後藤さんが話した通り、天沼陸橋のそばの「荻窪」「フラワー」の名がつくマンションがありました。「荻窪フラワーホーム」というマンションです(写真撮影報告書2)。

エレベーターで8階にあがると、804号室は存在しました。

電気のモーターは冷蔵庫のスイッチのみがついている程度の回り方をしていました。

玄関ドア、1階の入り口にある郵便ポストには名前が記されていませんでした。

外から804号室を見上げると、布団やシーツらしきものが干してありました。

マンションの住所は杉並区荻窪[ ]となっていました。

九、後藤さんが監禁されていたマンションを確認したあと、宮村峻の自宅と会社を確認することにしました。

統一教会から教えてもらった自宅と会社の住所は「杉並区荻窪[ ]」です。

荻窪フラワーホームから歩いて20分くらいのところに宮村の自宅がありました。

宮村峻の自宅や車を写真撮影していると、近所から通報があったのか、宮村本人が出てきました。時間にすれば、30分程度でしょうが、立ち話をしました。私が名前を名乗ると、宮村は緊張した面持ちになり、最初の5分間は首筋がピクピクしていました。前述の「三」で書いた私のルポのことについての会話もありましたが、後藤さんに関する事で、宮村が語ったことを以下に詳述いたします。

——後藤さんのことを取材しているが、後藤さんを知っているか。

宮村「ああ、数年前に説得したことがある」

——後藤さんは12年間も監禁されたと話しているが。

宮村「監禁？そんなことは知らない。おれは家族から頼まれて説得に行っただけだ」

——玄関に南京錠が施されていたということだが。

宮村「そんなことは知らない」

——どのくらい説得に出向いていたのか。

宮村「数年前に1年間か1年半だ」

——これまでずいぶんいろんなところで説得をやっているようだけど、どのくらいの頻度で説得に出向くのか。

宮村「だいたい、月に2、3回行く程度だ」

——ということは、後藤さんが監禁されていた「荻窪フラワーホーム」には、54回出向っていたことになるが、本当に南京錠のことは知らなかったのか。

宮村「54回？」

——1年半、月に3回とすれば54回になる。

宮村「・・・」

宮村「俺は家族から頼まれて説得に行っていただけだ」

——しかし、これまで私が取材した例でいえば、すべてが外に出ることができないように玄関、窓がしっかり鍵をかけられた状態で、牧師などあなたのような脱会説得者がやってきては説得を受けている。

宮村「そりゃあ、悪いことをするから、家族が保護するんだ」

——保護といえば聞こえはいいが、実際は監禁だ。

宮村「俺は監禁なんかしない。家族が保護するだけだ」

——ところで、緊急入院となった後藤さんを見舞ったけど、一人で立ち上がることできないほど痩せ細っていた。可哀相な感じがした。

宮村「後藤が断食なんかするからだよ」

(この発言は重要だと思いました。自分が説得した相手が痩せ細った状態で緊

急入院したと聞かされれば、心配して様子を聞くのがふつうです。それを彼は顔色ひとつ変えることなく、平然と断食のことを口にただけでした。

また、宮村は数年前に1年から1年半説得に行っただけであとは知らないと言っていたにもかかわらず、後藤さんの2年前の断食のことを知っていたことには驚きました。宮村は、家族から後藤さんの様子を逐一報告を受けていたということです。

そうでなければ、痩せ細っていると聞かされれば、驚くとか、心配するとかするはずです。

家族から、後藤さんを追放するというお伺いがあったか、追放したという報告があったのは間違いないことだと思います。

私が自宅にやってきたのがあまりにも早かったので、最初の5分間はとても緊張したのだと思います)

——あなたは今も脱会説得をしているのか。京王プリンスホテルで月に1回相談会をやっていると、信者家族から電話で聞いたが。

宮村「・・・」

——今現在も、ある信者が荻窪のマンションで監禁、あなたの言葉でいえば保護されて、あなたの説得を受けているという情報を聞いたが。

宮村「・・・」

——後藤さんのお兄さんがあなたの会社に勤めていたと聞いたが、ほんとうか。

宮村「ああ、そうだ。今はいないが」

——あなたの会社の社員は、すべてあなたが説得し脱会させた元信者だと聞いたが。

宮村「すべてじゃなく、半々だよ」

——後藤さんから、あなたは■■■■子など元信者を連れて説得に来たと聞いたが。

宮村「そうだ」

——■■■■子は、被害弁連の事務局をしている■■■■さんのことか。

宮村「そうだ」

——同一人物ということか。

宮村「ああ、そうだ」

——あなたはなぜ脱会説得をしているのか。

宮村「家族から頼まれるからだ」

——頼まれるからやるのか。

宮村「そうだ。俺は人権の尊重とか正義とかそんな大上段に振りかぶった目的でやっているわけではない。家族から頼まれるからだ」

(他の牧師など脱会説得者たちが「基本的人権の尊重の立場から統一教会から信者を救出することを目的に脱会説得している」としていることを、意識しての発言である)

——頼まれたら、すべて引き受けるのか。

宮村「そんなことはない。俺の考えで引き受けるかどうかを決める」

——引き受けるかどうかの基準は何なのか。

宮村「そんなことを話す必要はない」

——ある家族の依頼には応じ、別の家族の依頼には応じない。恣意的なように思えるが。

宮村「恣意的？ともかく俺が必要だと思えば引き受ける。ただそれだけだ。どう俺が必要に思ったのかは話すつもりはない」

——なぜ、こんなことをしつこく聞くのかといえば、あなたが引き受ける条件について興味があるからだ。けっこう高い料金を請求するという話を聞いているし、またある信者家族の母親に「子どもを脱会させたいのだったら」と関係を迫ったという話も聞いているからだ。言っておくが、これは統一教会からの情報ではなく、反統一教会の陣営から聞いた話だ。

宮村「ハハハ。人は勝手にいろんな噂を流している」

——関係を迫ったという話は、「全国原理運動被害者父母の会」の会長である本間てる子さんが話している。

宮村「あの、キチガイババアか。勝手に噂を流しているだけだ」

——あなたの女性関係はけっこう噂になっている。当初あなたが活動の拠点としていた荻窪栄光教会から追放されたのも女性問題だったと言われているが。

宮村「・・・」

——女性問題が原因で、あなたの奥さんが体調が崩されたとも聞いているが。

宮村「・・・」

——ところで、■■■■子だが、あなたの愛人だと聞いているが。

宮村「ハハハ。人は噂を流すさ」

——■■■■さんのお父さんがあなたに「脱会させてくれるように頼んだが、娘を情婦にしてくれと頼んだ覚えはない」と怒鳴ったのは、被害弁連の一部の弁護士の間では有名な話らしいが。

宮村「・・・」

——ここでの立ち話ではなく、きちんと取材に応じて欲しい。

宮村「あなたの取材を受けたくない」

十、宮村に会った翌日、■■■■子の所在地を確認するために、再び荻窪に出向きました。



■■■■子は「青春を返せ訴訟」の原告団の一人であったため、住所は裁判記録にありました。

■■■■の現在の住まいである■■■■マンション■■■■号室（住所は杉並区南荻窪■■■■）の建物謄本を閲覧したところによれば、95年2月に賃貸ではなく購入していることがわかりました。現地を確かめると、後藤さんが監禁されていた「荻窪フラワーホーム」から歩いて3、4分の至近距離にあることがわかりました。

脱会説得によくやってくる元信者として、後藤さんが■■■■子の名前をあげた理由がわかりました。至近距離ですから、しょっちゅうやってくるのが可能であり、実際によくやってきていてそれで印象に残ったのだと思います。

「荻窪フラワーホーム」は宮村の自宅から歩いて20分、■■■■のマンションから歩いて3、4分、宮村の自宅と■■■■のマンションは歩いて17、8分。いずれも近所と言える近いところにいたことが確認できました。

最後に、お願いの訴えを述べておきます。

統一教会は、信者が高額の献金をしたり、正体を隠して勧誘するなどの問題点があり、社会的に批判されてもいい教団です。

しかし、問題があるからといって信者を監禁し、監禁下で説得していいという理由にはなりません。

後藤徹さんは、31歳から44歳まで、外の世界に一步も出ることなく、監禁場所で過ごしてきました。文字通り、物理力をもって青春が奪われたのです。こんなひどいことが許されていいはずがありません。

これまで、ルポの表（月刊『現代』288頁）にある富澤裕子さん、寺田こずえさん、元木恵美子さん、今利理絵さんはそれぞれに脱会説得者を刑事告訴しています。その結果、牧師の高澤守（富澤さん、寺田さんの監禁に関与）、牧師の松沢裕とその妻（元木恵美子さんの監禁に関与）が起訴猶予で不起訴処分、牧師の黒鳥・清水（今利理絵さんの監禁に関与）が嫌疑不十分で不起訴処分になっています。

20歳以下の少年ではなく、成人の拉致監禁に関わりながら、不起訴は論外としても起訴猶予処分とは、日本ははたして法治国家なのかと、ただただ驚くばかりです。

どうか厳格かつ厳正に捜査が行なわれ、起訴されることを望みます。起訴された場合、検察が刑法に基づいた刑罰を求刑することを望みます。

これから捜査されるにあたって、次のことに留意してください。

宮村峻は立ち話の中で、「後藤はどうせ訴えてくるに違いない。だから、俺が

監禁にかかわったかどうかは法廷の場ではっきりさせる」と私に語っていました。

おそらく、後藤さんの家族から徹さんを追放したという報告を聞いて、宮村は後藤徹さんが刑事告訴、民事提訴することを覚悟したと思います。明治大学法学部を卒業し、司法試験の勉強をしていたこともあるという宮村ですから、当然、起訴されないように手を打ったと思います。

その一つは、関係者全員で「監禁はなかった」「ただ宮村さんたちが脱会説得に訪れただけだ」と口裏を合わせることです。おそらく監禁の証拠はすべて隠滅したでしょうから、全員で「監禁はなかった」といえば、警察が監禁の立証を行なうことは困難だと見通していると思います。

もう一つは、仮に監禁を認めるとしても、宮村たちは監禁されていることは知らなかった、後藤さんの家族がやむにやまれず「保護した」と口裏を合わせることです。

これまでたくさんの拉致監禁事件が起きていますが、家族の判断で、家族自ら自分の子どもを監禁することはありません。脱会説得者たちはそれぞれに勉強会を組織しており、信者家族に対してこう教え込んでいます。

「統一教会の信者は、脱会説得者が説得にくると逃げるようにマインドコントロールされている。そのため、信者を説得するには『保護』（拉致監禁）するしかない。子どものことをほんとうに愛しているのなら、子どもを保護しなければならない。保護する以外、脱会させることはできない。保護をするのは家族が主体的にやったというようにしなければならない」

このように教え込んで、家族が拉致監禁することを指示し、拉致監禁が発覚した場合には家族自らの意思で「保護」したことにするのです。北海道から九州まで、驚くほどワンパターンです。

私が憂慮するのは、警察の皆様方が「親が子どもを監禁したのは子どものことを心配してのことだ」という同情の気持ちを持たれることです。そのような気分仕向けられるのも、拉致監禁を行なう人たちの手口であり、全国的に行なわれているワンパターンの一つです。

「子ども」といっても、後藤徹さんは監禁されたときは31歳でした。

構図は、31歳の成人男性が統一教会の信仰者を持ち、その親たちはそれに反対する—という単純なものです。反対するのであれば、折りを見て、意見を闘わせればいいだけのことです。監禁する必要も必然性もありません。

もしこんなことが同情されるのであれば、成人の子どもを監禁してすべて親の希望通りの人間にすることができます。突拍子もないように聞こえるでしょうが、反権力、反警察の親が、現職警察官の子を監禁し、専門家を呼んで警察の不祥事を一方的に示し、辞職しない以上何年間でも監禁し続けることが可能

なのです。

私が拉致監禁問題に関心を抱くのは、本質的なところで、拉致監禁によって親の希望通りの子供にすることができるという点にあります。

このことに留意して、厳格な取り調べが行なわれることを希望しますし、関係者の口裏合わせなど証拠隠滅の疑いがあれば、逮捕、拘留しての取り調べが必要かと思えます。

出すぎたことを書いたかもしれません。その点は後藤徹さんの12年間余りの青春を奪った怒りの声だとしてどうかご寛恕してください。

以 上